

「ドーナ」教授の序文あり、原著を増補し、且つ寫眞版を加へたれば、却つて利便を加ふ。

先史考古學其他各國考古學に關する參考書の解題は、更に機を得て之を試むる可く「考古學の乘」は一先づ本稿を以て大尾となす。(濱田)

飯岡義齋

文學博士 高瀨武次郎

一 飯岡と篠田

飯岡と云ふ姓につきては『大日本人名辭書』に「イヒヲカ」とし、木崎氏の『賴山陽と其母』に「イノヲカ」と假名を附せり。次に飯岡とも又篠田とも兩姓を用ひたるは春水の作れる義齋の墓誌銘の中に此家の祖先に飯岡を姓としたる人も篠田を姓としたる人もあれば兩姓を時々用ひたらんか。義齋の親戚に篠田鏡藏と云ふ人あり。即ち之を梅颯女史の甥と爲す。斯かる理由にて時には篠田徳安と記したるものを見るなり。誤りて飯岡義齋と篠田徳安とを兩人と見る者なきに非ず、注意すべし

飯岡義齋を以て行はる。其先は佐々木義實より出づ。義實の別子を飯岡義政と曰ふ。先生七世の祖なり。曾祖閑徳は大阪に住し、醫を以て生を爲し、篠田氏を稱す。祖は忠益、考は忠嘉、妣は南氏。先生獨り儒を業として徒に授く。初め十餘歳にして怙恃を亡ひ、自ら幼弟を撫育す。艱苦の状は言ふべからざる者あり、二十歳にして鈴木貞齋に従うて遊ぶ。貞齋は其の謹篤を愛し、提誨尤も厚し

二 處士飯岡澹寧先生墓銘 (賴春水作)

貞齋既に逝き、石田氏の心學を好み、水に立ち、雪に坐し、苦修極めて力む。偶、篤疾に遇ひ、苦惱の至と雖も亦た少しも懈らず。遂に能く其の所謂大悟徹底なる者に詣る。當時其社は推して宿徳と爲し、皆な弟子の禮を執れり。偶々魯論の郷黨篇を取りて而して之を讀み、幡然として曰く、吾道は斯に在り焉、諸れを遠きに求む、之を石田の禪習と爲す。其心は朗瑩なるが如くにして而して渣滓の工夫あり、縝密たるが如くにして而して滲漏あり、皆な道とするに足らざるなり。郷黨一篇の如きは俯仰惟だ道のみ。猶ほ造物化工の物に於ける其の然る所以を知らざるが如きなり。必ず是くの如くして而して後に渣滓なく、滲漏なく、全體大用昭然として觀るべきなり。今之を求めんと欲せば、程朱に由るに非ずして何を以てせんや。と遂に舊學を棄て、純如たり。乃ち先緒を尋ぎて堅苦自ら勤む。是に於て弟子を謝遣して曰く、吾れ

已に轍を改めて而して尙ほ舊徒を引くは則ち義に非ざるなりと。生理頓に零肅たり。然れども自ら守りて年所を歴たり、生徒復た進む。都下鬱として醇儒の望あり。其の家を御むるや嚴正、其の徒に授くるや必ず課程あり。故を以て諸の卑幼も皆な儀容あり。平居極て貧にして而かも困窮を救卹すること常に及ばざるが如く、其の事を斷するや明決にして、毫も滯吝の意なし。亦た以て其の涵養を驗するに足れり。其の世に於けるや異を立つるを欲せず。又流俗に徇はず。其の言に曰く、性命の理は之を萬物の著に求め、天下の事は之を一心の微に本づく。夫の無用の體の如きは以て立つこと無く、無體の用は以て行ふこと無し、體用相涵して而して後に之を儒者の學と謂ふと。夷檢肅穆優游として歳を卒ふ。其の鄰初め淺川氏に配し三子あり。天す。後ち來島氏に配し三女を生む。長天し、次は惟寬の妻と爲り、次は江戸昌平教官尾

藤孝肇の妻と爲る、弟孝鍾を以て嗣と爲し、醫を業とす。門人故舊と議し日を卜し。大阪城東小橋龍淵寺の次に葬る。津和野藩教授山口正林は其の門人なり。狀を爲り惟完に屬するに銘を以てす、惟完は無似なれば固より先生を銘するに足らず。然れども先生の世に在るや、學は其歸を同うするを以て托する所ありと爲す。義として辭すべからざるなり、因て銘す。

學其異を辨じ毫釐も必ず敵かなり、理其精を究め纖悉も畢く照す、一息の頃に戰兢し萬物の表に豁達す、精明純一、事に遇て洞然たり、孰か先生の徳の全きを知らん。

寛政三年辛亥春二月八日婿安藝頼惟完撰。

(原文の漢文を和譯す)

三 義齋翁の子女

義齋の子女は、春水作の墓誌に據れば、三子は夭し長女も夭し、唯だ二女のみとす。二女の中に於て、一は頼春水に嫁す、名はしづ子、梅颯と號

し、一はなほ子といひ梅月と號し、尾藤二洲に嫁したり。大日本人名辭書には續近世叢語を引て二女とす。唯長命を保てる者を擧げたるのみならん。大阪名家墓所記には三女とす。蓋し來島氏の出たる三女を指せるなり。

四 義齋完空當時の大阪の學界

頼春水は藝州竹原の人、十九歳の頃より大阪に上り、一旦歸國し、二十一歳の時更に大阪に遊學せり。時に中井竹山の懷徳堂、即ち大阪學問所の隆盛なるあり。之に對して片山北海を盟主とする混沌社といふ文人詞客の大なる勢力あり。此二大勢力を外にして非徂徠學者として聞えたる蟹養齋(那波魯堂の弟)奥田尙齋(元繼)、伊豫の川の江村より出て、後に江戸の昌平坂學問所へ教官として徵され寛政三博士の一人たる尾藤二洲あり、淺見綱齋の學統を承けて一代の醇儒と呼ばれたる篠田徳

安(飯岡義齋)あり。又後に伊勢の長島侯に聘せられたる十時梅厓等ありて、大阪文學の全盛時代と云ふべき諸大家の競起の時なりき。春水は中井竹山に愛せられ、又一面片山北海の混沌社の諸名流と交際し、最年少にして學問才名は先輩を凌ぐばかりなりき。安永二年春三月江戸堀北通一丁目の濱側に青山社といふ家塾を開く、時に年二十八歳なり。春水と云ふ雅號は江戸堀川の水より取れりといふ。安永八年十一月に結婚せり。

五 義齋翁と石門心學

石田梅巖、名は勘平、丹波龜岡の人、心學道話の一派を創む、之を石門心學と云ふ。義齋が直接に何人に就きて心學を修めしかは明かならざれども、一時は非常に熱心に修得して其の奥旨を究め、大悟透徹せしことは疑ふべきなし。後日に心學を去りて程朱學に入りしと雖も、心學の修養が義

齋に影響せることは蓋し淺少ならざるべきか。以上の如くなれば義齋は最初は山崎闇齋の直弟子淺見綱齋の派の鈴木貞齋に學び、後ち心學に入り、最後には醇乎として程朱學派に止まれるなり。闇齋と雖も全然程朱を離れたるものに非ずと雖も、程朱學の深く日本化せるは闇齋學派の特徴と謂ふべく、是に於て自ら一般の程朱派とは差異を示せり。

六 義齋翁と闇齋學派

山崎闇齋

淺見綱齋

鈴木貞齋

初め鳥羽金次郎名は金充金七と稱す土佐の人伊勢に寓し大阪に徙る

飯岡義齋

山崎開齋

植田(又は上田) 玄節

名は成章、字は玄節、動山と號し、又良背といふ。陽の人、藥州府島藩に仕ふ、享保二十年三月廿三日歿す。歳八十五。

鹽谷鳳洲

春水が年十九歳の時に歿す、

頼春水。

春水は十九歳にして大阪に遊學す。廢鳥竹原等には玄節の學を受る者甚多し。

蓋し春水は上田玄節といふ、開齋の篤信派より系統を引けば、純然たる開齋たること明かなり。春水は義齋と同様に開齋派の學系を受けて、後に稍程朱學に純粹と爲るに至れるなり。

七 春水と梅麗との結婚

義齋は六子を獲て既に四子を失ひ、只だ靜子直子の二女の存せるのみ、此の姉妹は善良なる家庭に生れ、父母の注意深き教育を受けたれば、其の

品性も學藝作法も尋常ならず、中に就ても姉の靜子は夙に文學の嗜深く、當時著名なる小澤蘆庵に國風を學び、作歌も巧妙に、筆蹟も優れたり、義齋夫妻の鍾愛も極て深かりしといふ。

中井竹山は春水の爲に姉靜子を望みて媒酌の勞を執りたり。蓋し春水は早とに義齋と交はり、能く義齋の人物を知るのみならず、女靜子の事をも既に之を知れり。又春水の父亨翁は嘗て大阪に來り、京都に到り、竹山よりも蘆庵よりも能く靜子の噂を聞きたれば、歸來直ちに竹山に書を送りて、春水の妻に靜子を貰ひ呉れよと依頼したり。斯かる緣故にて竹山が月下氷人と爲れるなり。

春水時に三十四歳、花嫁は十九歳にて竹山の媒酌なれば當時評判と爲れりと云ふ。竹山合巻頌を作りて頼子秋に贈れり。

予爲千秋併府下醇儒篠田(飯岡)義齋翁之長女以己亥十一月成婚故贈云

翁之氷清。婿之玉潤。吾聞其語。今見其人。我何人也。爲締斯親。昏乎未合。四外其傳。

昏乎既合。豈不以文。(奠陰集)

此の婚禮頌の詞が時の文人間に弘く流轉したれば、混漉社の盟主片山北海よりも

(前略)千秋婚儀誠に大慶に存候、先生御幹旋、事得遂、忝御事に奉存候

片山中藏

中井善太様 (大道突漢氏藏)

と云ふ書面を送りて祝辭と感謝の意を表せり。四外其傳の句を見るに、結婚前に於ける世間の評判も高かりしなるべく其の評判は嫁しづ子の才色と父義齋の醇雅と春水の文名と媒介人竹山の英名とに由るならん。

又春水は自ら結婚當時の光景を記して曰く、

余之於蕪爾、竹山自爲氷人、以崇岳翁齒德、且

有家君之托也。時爲十一月。余冬日不爐既久。子愿(諱は奇盛、通)爲家人送一爐於此始有爐。有女僕。是時竹山作合昏頌。都下傳誦(在津紀事)。と以て靜子と春水との結婚が大阪に於て評判高かりしかを知るべし。

八 義齋の家庭教育

義齋先生の肖像は廣島の頼氏に藏し、其の寫眞は『頼山陽』及び『頼山陽と其母』の巻頭に載せたり其の肖像を見るに、容貌溫粹柔和、軀幹長大豊肥なる、眞に醇乎たる老儒を想見すべきものあり。其の二女の一が頼春水に嫁して山陽を産み、一が尾藤二洲に嫁して水竹を生めり。斯く二女が名士に嫁して良妻賢母の儀標と爲りたるは、義齋先生夫妻が嚴格にして周到なる教育に由るは勿論、二女の才色も亦尋常一様ならざりしに由らん。斯父母にして斯の二女あり、斯の二女にして斯の二婦

あり、眞に家門の幸慶なりと謂ふべきなり。

九 春水梅颯と小澤蘆庵

安永九年の新年に春水梅颯の新夫婦は藝州より上り來れる父亨翁に伴はれて新婚旅行を京都に爲せり。亨翁は和歌を好み小澤蘆庵に久しき以前より添削を頼みし縁故あり、梅颯も亦た蘆庵の弟子なれば京都に上りて第一に蘆庵の宅を訪問せり。其の蘆庵は當時有名なる國文學者にして、特に和歌に長じ伴蒿蹊上田秋成等と交を結べり。蘆庵の和歌の弟子は多かりしが、其中に三井の一族も嘗て歌道を蘆庵の門に學べり。蘆庵の病める時、之を訪ふ者なかりしかば、蘆庵は深く三井の薄情を怒りて絶交状を送り、其の末尾に二首の歌を附記せり、其の一首に曰く、

人の世の富は草葉に置く露の

風を待つまの光なりけり

と蘆庵は平安中興の良師と稱せらる。其の墓は洛の東北白川村に在り。

蘆庵亦春水梅颯の新婚を祝して一首を詠めり。

其の歌に曰く、

咲かゝる契とならば藤花

松のみさをにならへとぞ思ふ

と、老歌人の精妙なる一首は能く祝詞と訓戒とを兼ね、梅颯一生の操行も亦此祝歌の趣旨に合せるを見るなり。但だ此歌は坂本箕山氏著の『頼山陽』には梅颯女史の歌とせり。更に調査を要す。

十 山陽の誕生

頼山陽は安永九年冬十二月二十七日に生る。祖父亨翁は生るゝ孫が男ならば久太郎と名を附けよと言ひて國元へ歸へれり。果して男子生れたれば、春水は喜の餘りに左の一首を賦せり。

不知吉夢是何祥。
忽喜墮々報弄璋。

家君占斷熊巖兆。能爲預名久太郎

と此の久太郎は他日天下後世に英名を轟かせる偉人たりしなり。

外祖父義齋翁と初孫山陽とに就き左の記事あり久太郎の産衣は義齋翁が祝へるものなり。

うまこ久太郎初生して、衣を贈りける、其の色黒かりけるに、

久かたのあめの恵にならへよと色にいはひて贈る産衣

と云ふ歌あり。蓋し天地玄黄と云へば、天は玄にし、黒色なれば其色に配當して祝歌を作れるならん。即ち黒色より天を思ひ浮べて天の恵と掛け、其の天恵に倣うて無事に成長して良き人たれよと祝へるなり。外祖父の祝歌を空しうせず、他日大文豪勤王家歴史家として日本の學者中にて最も著名なる偉人と爲れり。父の方を見るも、母の方を見るも、善良にして嚴肅なるのみならず、兩家と

も子弟の教育には非常に深き注意を拂へり。一大文豪頼山陽を産出するは決して偶然ならず。富士山の高きを爲すは即ち其の三國に跨がれる裕野の廣大なるに由るなり。基礎の十分ならずして高大を致すものは非ず、今の子弟の教育に當る者宜しく眼を此に着くべきなり。

十一 忠孝の守袋

山陽は外祖父の贈られたる黒色の産衣を着て二歳の時、即ち天明元年閏五月朔大阪を出發し、春水梅颯の兩親に抱かれつゝ、藝州竹原に歸りて、祖父亭翁に初對面を爲せり。亭翁は大に喜び、小半紙に筆を走らせて、忠孝の二字を書して守袋に納めさせたり。此二字は今猶ほ廣島の頼彌次郎氏之を珍藏し、其の寫眞は木崎氏著の『頼山陽と其母』の巻頭にも載せたり。山陽が勤王家として世に大著述を爲すは決して偶然ならざるなり。

十二 山陽の幼時と頼杏坪

天明四年九月十六日頼杏坪は單身江戸より歸藩の途に就き、大阪に立寄りて立賣堀の頼家を見舞ひ、出立の節は幼稚なる山陽は叔父と別を惜しめりといふ。

二十八日夕、(中略)西の海にと立出る、澹寧老人(義齋)はじめ名残を惜み給ふ、家姪(山陽)ことし五歳なり、此たびにて離合四たびなりぬ、ことしは智慧つきぬれば、いと別れを惜むさまに見えたり(頼杏坪先生傳)

と杏坪の紀行に記載せり。

十三 義齋に就ての謗文

頼春水が義齋先生に就きて詠じたる詩は唯一首あるのみなり。

岳父義齋老人故居

盧橋陰深漏夕陽、荒庭巾影獨彷徨。讀書惟寂人

何在。四壁唯聞遺墨香。(春水遺稿、詩)

過澹寧居係展省竹原作。

曾別青山久、歸來暫得期、當斯展省日、憶我卅童時、危磴紅楓亂、短籬黃菊萎、白頭何可嘆、心有老松知。

但だ此澹寧居は藝州の竹原の頼氏にあるものにして飯岡澹寧先生には直接の關係なきものと知るべし。特に附記して區別を明にす。

十四 義齋と二洲

靜寄軒文集に尾藤二洲が岳父義齋翁の爲に其の杖に銘したる語あり。

飯岡翁杖銘 二洲

不枉不撓汝其天、補相君子汝其賢。

二洲の遺文は靜寄軒文集三冊に收むれども、義齋に關する作は唯だ此の銘あるのみなり。

二洲の長子の水竹とす、江戸の儒者なり。名は積高、字は希大、弦齋又た水竹と號す。人と爲り豪邁にして自家生産を事とせず亦貧洗ふが如し。而して遊寓寄食の徒常に十數人あり、其の少長學殖は二洲に及ばざるも、卓識洪量は之に過ぐと、安政甲寅十二月十四日を以て歿す。(湖山撰書屏風)。

十五 疑 問

小橋寺町龍淵寺の義齋の墓背には忌辰を天明四年甲辰七月二十一日歿とし、近世叢語には忌辰を寛政元年乙酉十一月八日とす。然り而して頼春水の筆に成れる處士飯岡澹寧先生墓銘には寛政元年巳酉十一月八日病卒、享年七十七又三とす。(春水遺稿)何故に右の如き差違を生ぜしや。猶ほ一層調査を要す。浪華人物誌には續近世叢語の義齋の傳を引けるのみ

猶又春水遺稿に據れば、義齋の第一の妻は淺川

氏と云ひ、三子ありしも早く亡し、後妻は來島氏にして、三女を生み、長女は早世し、二女は頼氏と尾藤氏に嫁せりとす。然るに龍淵寺の墓所には義齋の墓と並て慈室磯野氏とあるのみ。慈室とは義齋の後繼者より曰へるものならん。果して磯野氏義齋の妻なりしや否や、是亦未だ知るべからず。若し義齋の母の墓ある程ならば殿父の墓もあるべからん。後の君子の高教を待たんのみ。

坂本箕山著『頼山陽』には春水遺稿の處士飯岡澹寧先生墓銘を譯載せり。猶ほ卷頭には義齋先生の肖像を掲げたり、其肖像は本崎氏の『頼山陽と其母』にも掲げたるものにて、廣島の頼彌次郎氏の藏するものなり。且つ坂本箕山は梅圃女史及春水に關しても稍詳しき事を記せり、就て見るべし。

十六 墓 地

頼春水の作れる岳父飯岡澹寧先生墓銘は龍淵寺

には建碑なし。何所にありや。

義齋飯岡先生墓(表面)

天明四年甲辰十一月廿一日歿(背面)

義齋先生墓の左に

慈室磯野氏墓(表面)

文化庚午十月四日卒

又其右に(表)

存齋飯岡先生墓(表面)

文化甲戌七月十五日卒(背面)

義齋先生の墓より一間許東の方に

滄浪飯岡先生墓(表面)

寛政丙辰六月十六日卒(背面)

あり。

(附記)大正八年四月二十六日大阪市岡高等女學

校職員生徒相謀て義齋先生墓前祭を執行し、畢

て向の清堀尋常高等小學校講堂に於て義齋先生

表章の爲に講演會を催せり。

十七 參考書

楠本碩水増補

訂正 増補 崎門學派系譜

木崎好尙(愛吉)著

頼山陽と其母、

坂本箕山(辰之助)著

頼山陽

續近世叢語、

經濟雜誌社編

大日本人辭書

幸田成友著

大阪市史

中井竹山著

奠陰集

尾藤二洲著

靜寄軒文集

賴春水著

春水遺稿文、詩、別錄(在津紀事 師友錄)附録

浪華名家墓所記

且又た義齋に關しては文學士幸田成友氏著大阪市史第一卷にも浪華名家碑銘集、在津紀事、師友志、浪花草等を引用して唯だ左の簡單たる記事を

再び秦邊紀略に就て

文學博士 内藤 虎次郎

爰に本誌第三卷第三號に於て梁份の秦邊紀略に就て、聊か記す所ありたれども、猶ほ語りて未だ詳らかならざる者あり、蓋し當時未だ此書に關する文獻に就て、精細なる考査を經るに遑あらざりしを以て、今其の遺漏を補ひ、且つ其の誤謬を訂して再び述ぶる所あらんとす。

此書に就て評論せる前人の著述中、先づ第一に

爲せり。「春水及二洲が飯岡義齋澗の女を娶れること、文豪山陽が安永九年十二月を以て春水の江戸堀の僑居に呱呱の聲を發したることを忘るべからず」(完)

注意すべきは四庫全書總目とす。即ち史部地理類邊防の屬の存目中に、此書を載せて卷數を四卷とし、直隸總督の探進本とし、

不著撰人名氏。書中首卷河州條注内有西夷部落三十有奇。康熙十四年圍衛城一月。康熙二十二年。又犯衛地之語。又四卷近疆西夷傳内載康熙二十四年祝囊同科爾坤十八部由古北口入觀事。